ふくしまの古典文学

19 野雁集　安藤野雁

和歌　元治元年（一八六四）

家庭的に恵まれず、貧窮と流浪のうちに死んだ野雁は、歌を詠むことと万葉集の研究にみずからを慰めた。家集に『野雁集』があり、明治になってから佐佐木信綱らによって認められ、世に知られるようになった。

いづこかはさしてわがやどゆきまじり野にも山にも花のへに寝む

何事を思ふとなしの酔泣にたねなくおつる我なみだかな

23 信達歌　熊阪台州

漢詩　天明七年（一七八七）

天明三年（一七八三）以降続いた大凶作、洪水、飢饉と、それらによる多数の死者とを目の当りにみて、信達地方の人々を励ますために書かれた、信達の地やその歴史などを歌った長詩（七言で一四七句より成る）である。

また、友人鹿柴沓人（向鎌田月の輪の人）が、土湯、本宮、二本松に遊んだ自分の行状を、台州が指導する信達詩人たちに筆記させ、これに台州が筆を入れて成った『魚籃先生春遊記』（天明元）も福島に関わる書である。

25 可笑記　斎藤親盛

仮名草子　寛永一九年（一六四二）

『徒然草』にならって、日本や唐の国（中国）の故事や自分の見聞を記したもので、仮名草子に共通する教訓的内容となっている。一般読者特に武士や学者が読むことを期待していたようで、社会、人生に関する意見や教訓を中心に、法談、小咄等も混えている。

二本松の藩儒、大鐘義鳴はその著『相生集』の中で、『可笑記』を斎藤家から借りて読んだことを記しており、これから長らく不明であった著者が親盛であることが、十余年前に明らかになった。

26 黒塚／安達原　金春禅竹／巌谷小波

謡曲／物語　室町時代中期／明治二九年（一八九六）

黒塚は平兼盛の「みちのくのあだちが原の黒塚に鬼こもれりと聞くはまことか」の古歌にちなむ名所で、古くは『大和物語』、謡曲『黒塚』（観世流『安達原』とも）となり、また江戸時代の浄瑠璃歌舞伎、『奥州安達原』となって世に知られている。

謡曲は山伏祐慶が鬼女の家に一泊し、念力で災難をまぬがれる話であり、歌舞伎は安倍家再興を計る一族と、源義家との対立のなか、安倍方の岩手御前が鬼女の役割で登場する話である。

真弓山観音寺境内には観音堂と鬼の住んだという岩屋（奇岩大石の集まり）がある。黒塚というのは、観音寺の門前を左（北）に行った所にあり、鬼をうずめた所だと、おくのほそ道の芭蕉も聞かされている。

明治になり児童文学者巌谷小波は『日本昔噺』全二四編の中で『安達か原』を書き全国の子供たちに愛読された。

安藤野雁（あんどう・ぬかり）
文化一二～慶応三・三・二四。半田銀山の役人の家に生まれ、瀬上の内池永年の門人となり、共に本居大平に師事。主家の転任にともない大分の日田、江戸と移り、その後は放浪のうちに埼玉の熊谷で没した。旅中も筆を放さなかった『万葉集新考』は、畢生の事業である。

熊阪台州（くまさか・たいしゅう）
元文四・四・二三～享和三・三・二二、伊達郡高子（現、保原町）生。江戸時代の漢詩人。名は定邦また邦（ほう）、字（あざな）は子彦、通称宇右衛門。宝暦一〇（一七六〇）年江戸に遊学、郷里では白雲館（自宅）社中の人々と詩文を通じて交わる。窮民の救済にもあたった。

著作に『西遊紀行』、『永慕編』、『含陽（がんとう）紀事』（児童向昔話の漢訳）、『律詩天眼』などがある。

白雲館跡

斎藤親盛（さいとう・ちかもり）
？～延宝二。山形の最上家臣の家に生まれたが、浪人して武蔵の国（江戸近在か）に住んでいた。その人物を知った二本松藩主丹羽光重が、親盛の子秋盛を召しかかえて以来、二本松に住むようになったらしい。二本松には子孫が現在も在住し、松岡寺には親盛ら一族の墓がある。

金春禅竹（こんぱる・ぜんちく）
応永二一～文明三。能役者、能作者。『杜若（かきつばた）』『小督（こごう）』など多くの謡曲を書いたが、その全体像はまだ明らかではない。能楽論も多い。

31 好色一代男

井原西鶴　浮世草子　天和二年（一六八二）

主人公世之介の、幼時から六〇歳をこすまでの好色遍歴をえがいたもの。全国を股にかけて漁色の旅をするなかに、奥州へもさしかかり、「なを奥すぢにさしかかり、八町の目、大宮のうかれ女を見尽し、仙台につきてみれば」とある。この「大宮」は、八町の目（二本松北）との関係から、本宮の誤だろうと言われている。本宮は、同じ西鶴著の『一目玉鉾』に「旅人さだまって泊所なり。遊女有ておもしろし」とあるから、それは十分に考えられることである。

33 復讐奇談安積沼・安積沼後日仇討

山東京伝　読本・合巻　享和三年（一八〇三）・文化四年（一八〇七）

この二つの読本、合巻（小説）はいくつもの敵討が重って複雑な話となっているが、その中心をなす人物は「小幡小平次」で、幽霊役者として有名な小平次が、「安積郡笹川」で興行の後、「安積沼」で殺され、その怨霊が復讐するというのが太い筋となっている。『後日仇討』の方では、まだ成仏しない小平次の亡霊が、やはりいろいろの復讐に加わるが、最後にそれが安積沼に住むかわうその仕業だということがわかる。

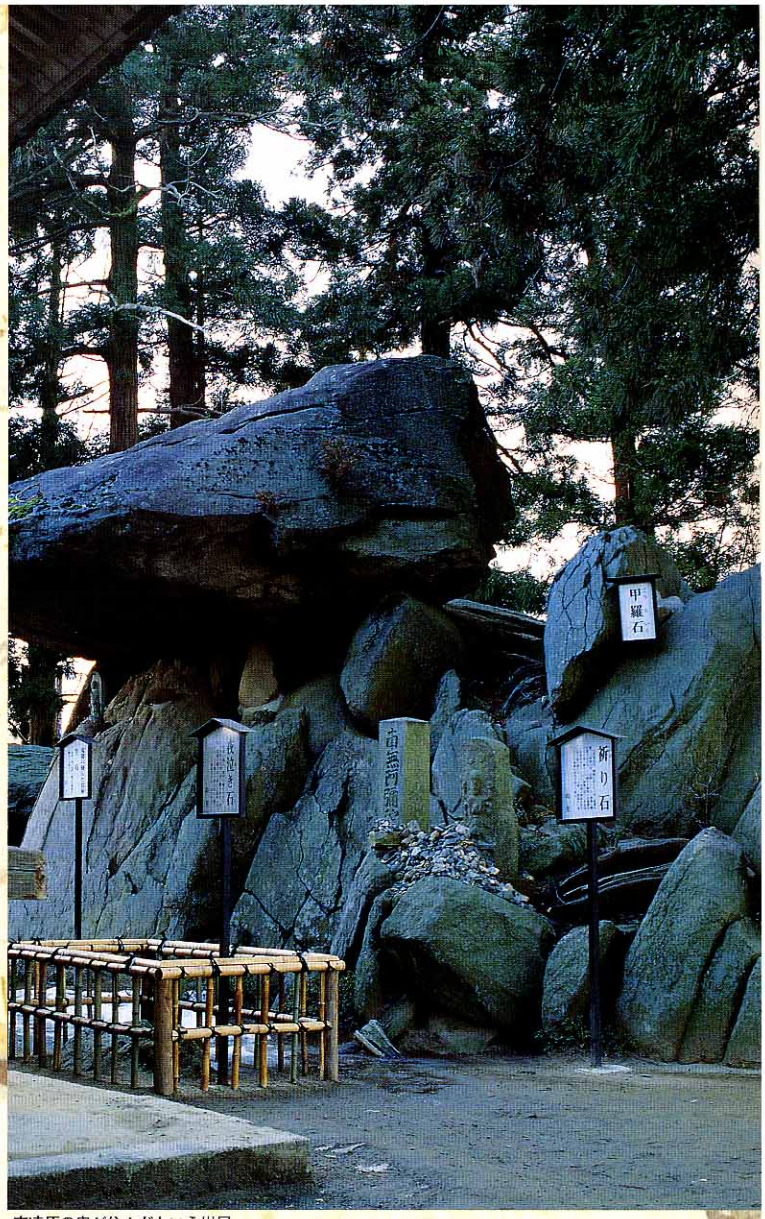
古典の名所「安積沼」が怪談の現場とされているが、この作品の一五〇年も前におくのほそ道の芭蕉が訪ねても判らなかった安積沼であるから、この舞台を確定することはできない。

この作品は好評で度々脚色上演された。大正一三年、郡山出身の鈴木善太郎がこれをもとに『生きてゐる小平次』を出して評判をとっている。

34 艮斎文略

安積艮斎　漢文集　天保二年（一八三一）

『艮斎文略』は漢文集で、かな文集『艮斎閒話』と並ぶ艮斎の代表的著作である。聖賢論あり、史論あり、諸書序文あり、紀行文あるいは偶感ありと、名文家艮斎の面目躍如である。中でも文学的なのは紀行文で、たとえば『東省日録』など郡山帰省の記録には、艮斎の山水愛好癖、家郷思慕の念が読みとれて面白い。



安達原の鬼が住んだという岩屋

41 伊達衣

相楽等躬　俳諧　元禄一二年（一六九九）

『伊達衣』は須賀川の俳人・相楽等躬が編んだ俳諧集で、芭蕉関係の発句や俳諧が多く収められている。芭蕉とは、芭蕉がプロの俳諧師になる前からの付き合いがあり、芭蕉の宗匠立机披露に発句を贈ったことや、奥の細道の途次にある芭蕉を自宅に迎え、七泊させたことでも知られている。

『陸奥名所寄』（別名『蝦夷文段抄』）という歌枕研究書もあり、芭蕉も行く先の歌枕について尋ねている。そのことは、元禄二年刊になる等躬の俳諧集『忍摺』に出ており、同書には「風流のはじめや奥の田植歌」等、芭蕉が須賀川で詠んだ三吟歌仙その他が収められている。

42 晴霞句集

市原多代女　俳諧　嘉永六年（一八五三）

市原多代女の代表的な自撰句集。六五六句を収める。晴霞とは多代女の別号で、この集の中の

水かさに車はげしや藤の花

は、大正・昭和期の文部省小学唱歌「藤の花」にとり入れられているほど、多代女は幕末を代表する女流俳人として全国に知られた人である。

芭蕉を尊敬し、須賀川の十念寺に大きな田植塚を建立している。句は平明で清朗、俳句のよさをしみじみと感じさせる句境である。また書にもすぐれ、彼女の半切や短冊は多くの人に愛蔵されている。

巌谷小波（いわや・さざなみ）
明治三・六・六～昭和八・九・五、東京生まれ。本名季雄。尾崎紅葉らと硯友社をおこしたが、のち児童文学者として活躍し「こがね丸」などの作品を残した。

井原西鶴（いはら・さいかく）
寛永一九～元禄六・八・一〇。大坂の町人の家に生まれ、俳諧を学びはじめ、西山宗因らと談林の新風を送る。後に浮世草子作者となり、多くの作品を残した。

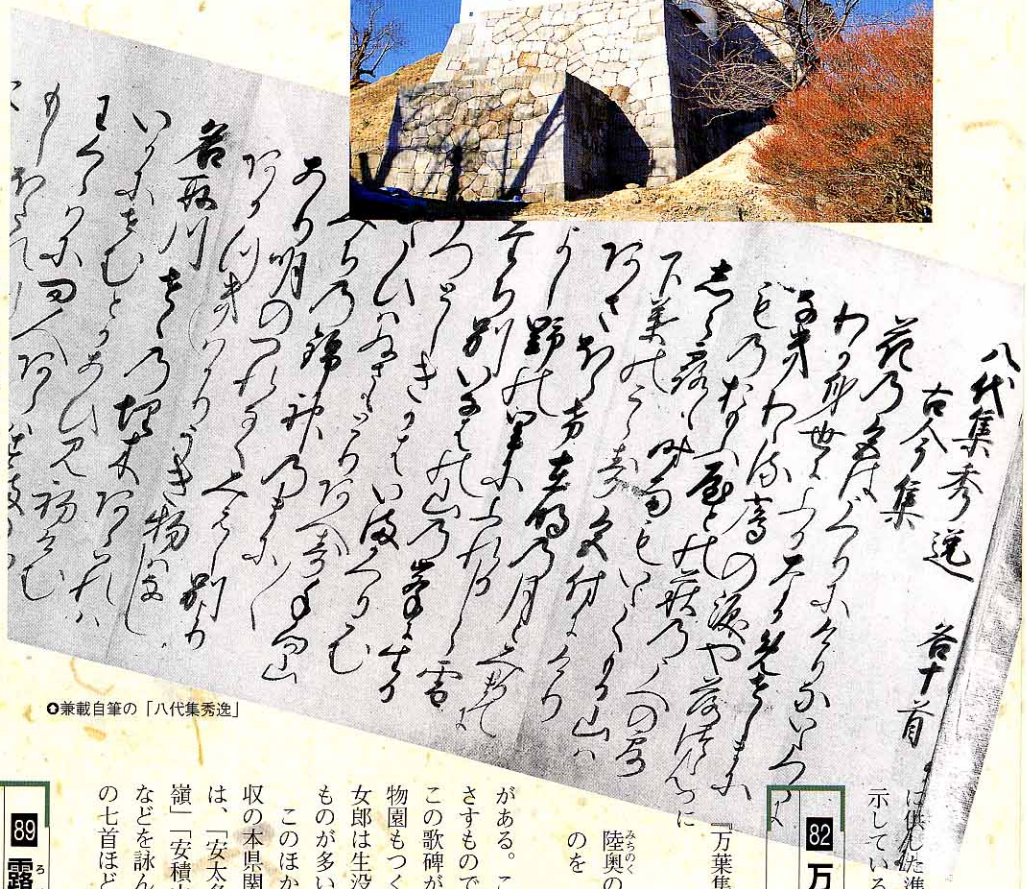
山東京伝（さんとう・きょうでん）
宝暦一一・八・一五～文化一三・九・七。江戸の黄表紙（きびょうし）・洒落本（しゃれほん）作者。たびたび幕府当局の取締にあいながらも戯作者（げさくしゃ）として活躍し、多彩な町人芸術を作り出した。

安積艮斎（あさか・ごんさい）
寛政一・三・二～万延元・一一・二一。郡山の安積国造社神主の三男に生まれ、二本松で勉学の後江戸に出奔。佐藤一斎、林述斎の門に学び、神田に塾を開き学名が高まった。二本松藩学校教授となったが、間もなく幕府儒官となり、昌平黌教授に昇進した。門下生は三千。吉田松陰ら幕末の志士、重野安繹ら明治の学者も多い。

相楽等躬（さがら・とうきゅう）
寛永一五～正徳五・一一・一九。江戸の諸色問屋（しょしきといや）に通って商品の売買をしていた商人で、須賀川俳壇の中心人物である。

○南湖公園

○白河の小峰城



○兼載自筆の「八代集秀逸」

51 花月草子（かげつそうし）

随筆　松平定信　文政元年（一八一八）

定信が幕府老中を辞し、白河に隠居したのち、好きな学問や風流世界のことなどを書きつづった随筆集である。地元関連の記事は少ないが、安積沼（郡山）の花かつみを論じ、能因の「こも」説を排し、「かたばみ」説を打ち出している。

他には、家中の学者に編集させた『白河風土記』『白河古事考』があり、これには古来謎とされた白河の関を、旗宿の関の森と考証させている。また隠居後の日常を記した『退閑雑記』があり、飯坂紀行など地元に関する記事が見られる。

65 新撰菟玖波集（つくば）

連歌集　猪苗代兼載　明応四年（一四九五）

文明二年（一四七〇）応仁の乱を避けて関東に下った心敬や宗祇の連歌の席に加わったのを機に、心敬を師と仰いだ兼載は、心敬と共に白河を経て会津に至り、そこで心敬から連歌の奥儀を伝授された。のちに京都に上り、宗祇の後をうけて連歌師最高の位である宗匠に就いたのは三八歳の時であった。

『新撰菟玖波集』全二〇巻は、明応四年（一四九五）猪苗代兼載が宗祇を助けて編み、後土御門天皇の奏覧に供した準勅撰連歌集で、室町最盛期の連歌の典型を示している。

82 万葉集

和歌　笠女郎（かさのいらつめ）　奈良時代末期

『万葉集』巻三に笠女郎が大伴家持（おおとものやかもち）に贈った歌の一

陸奥（みちのく）の真野（まの）の草原（かやはら）遠けども面影にして見ゆとふものを

がある。この真野は現在の鹿島町の真野川流域一帯をさすものであることが戦後に定説となり、昭和三五年、この歌碑が桜平山（さくらだいやま）に建てられた。その近くには万葉植物園もつくられ百数十種の植物が集められている。笠女郎は生没年、履歴不詳。家持に贈った恋歌に優れたものが多い。

このほか万葉集所収の本県関係の歌には、「安太多良」「会津嶺」「安積山」「松が浦」などを詠んでいるもの七首ほどがある。

万葉植物園（鹿島町）

89 露沾（ろせん）公詠草

俳諧　内藤露沾　江戸時代前期

時は秋芳野をこめし旅の土産（つと）（はせを餞別）

笠句へ桃咲関の切通し（勿来関）

暑くとも萩の葉音や旅紙帳（藤躬へ餞別）

一句目は芭蕉への餞別句。三句目の藤躬は、須賀川の相楽等躬に対する句となっており、露沾が芭蕉をはじめ江戸俳人たちのパトロンとして、また自らも風雅の世界に遊んだことをうかがうことができる。門人多数、交遊も広く、作品は多くの俳書に見られる。

市原多代女（いちはら・たよめ）
安永五～慶応元・八・四。俳諧の伝統を引き継ぐ須賀川が生んだ女流俳人。酒造業の家に生れ、早く夫に死別、俳諧を仙台の鈴木道彦、白石の乙二（おつに）師事した。

松平定信（まつだいら・さだのぶ）
宝暦八～文政一二・五・一三。徳川吉宗の孫、田安宗武の三男として生まれ、白河侯松平氏の養子となる。寛政の改革の厳しい為政者であると共に、すぐれた文学殿様でもあった。南湖を築き農業用水池とし、同時に文学的遊楽地として共楽亭、「一六景一七勝碑」を建てた。また画家・亜欧堂田善を育て、谷文晁を呼び白河だるまの意匠を考案させた。

猪苗代兼載（いなわしろ・けんさい）
享徳元～永正七・六・六。会津芦名の流れの猪苗代城主の家に生まれて出家したあと、心敬や宗祇を師として連歌界で活躍したが、五〇歳のとき関東に帰り、磐城平に庵を結んだ。のち会津各地を巡り、関東の古河に没した。
郷里の小平潟天満宮には、兼載晩年の自筆「紙本墨書八代集秀逸」があり、県重要文化財となっている。また天満宮、若松の自在院には碑が建っている。

内藤露沾（ないとう・ろせん）
明暦元・五・一一～享保一八・九・一四。本名義英。磐城平藩主内藤義泰（風虎）の二男。兄の死後藩主を息子に嗣がせ、自らは江戸藩邸と平高月の自邸とをかけ、専ら俳諧に親しんだ。家老松賀族之助（やからのすけ）のお家乗っ取りの策動（岩城騒動）を処断したことなども知られている。雫石太郎編『内藤露沾全集』（昭34）は、諸俳書から露沾句を網羅したもので便利である。